

# Dialogue/Sensoring 建築と人間の対話

建築が、人間の生命や身体と対話できる時代がやってきたのかもしれない。

建築の問いかけに人間が応答し、さらに建築が反応する。物体としての建築は動かないが、そこにいる人間や環境は動き、それらは互いに影響を与え合う。

近現代に実現した構造や設備の技術により、建築における機能や快適性は、ほぼ満たされたように見える。その先に、私たちが追求するのはなんだろうか？

医師の稲葉俊郎は「身体だけを見た医学では、わからないことが多すぎる」と語り、地球の力や生命との関係、西洋と東洋の医療や思想の融合を試みる。それを「全体性」を持って生命を捉え直すこと、と表現している。環境エンジニアの菅健太郎は、この「全体性」のことを、建築の世界では「環境」と呼ぶのかもしれないと語る。

この実験空間で、人々は、空気、温度、湿度、音、匂い、触覚など、ゆらぎのある環境の中を散歩する。庭もしくは草原のような風景の中、自らの知覚に鋭敏になり、建築と対話する。

身体は抜群のセンシング能力を持っている。それに改めて意識的になり、空間を巡る道すがら、環境や自分という生命と対話する。同時に、自分を含めた環境全体をセンシングする。ぼんやりとした心境が測定され、データ化される。心と身体、人間と建築がどこまでシンクロしているのか。主観と客観を往復しながら、環境のゆらぎと、自分の身体との応答を理解したい。

70年前、吉阪隆正は近代を象徴するようなピロティのある建築を、その場所の環境に沿わせるように日本館を設計した。私たちはこの場所を、時間が蓄積した地形として捉え、それに改めて向き合いながら、建築と人間が対話する次なる可能性の探求を始める。

馬場正尊(キュレーター/エディター)

近代建築が確立してきた室内環境は、その成立の過程で水や土といった要素を空間から排除し、同時に空調設備の発展によって、均質で安定したものへと導かれてきた。

こうした制御は衛生や快適性の観点から合理的であった一方、季節の移ろいや感覚の揺らぎを遠ざけ、環境と身体との関係を単純化する側面も持っていた。温度や湿度は均質化され、匂いや触覚的な差異は取り除かれ、身体が何も感じない状態が「快適さ」として定義されるなかで、空間は次第に感覚の差異を失っていった。

では、これらを排除するのではなく、取り込みながら発展していったとしたら、建築はどのような姿をとり得ただろうか。本展示はそんなオルタナティブな建築の可能性を探る試みである。

提示するのは、湿り気や音、匂いといった多様な感覚によって捉えられる環境である。五感に根ざした知覚を呼び戻すことで、分断されてきた身体感覚をつなぎ直し、人間の全体性の実現へとつなげていく。

日本の作庭は、水や土、光や音が繊細に構成され感覚に満ちた空間を形づくってきた。和歌に見られるように、風や匂い、季節の気配は、環境だけでなく感情を捉える契機となってきた。

本展示では、こうした感受性と構成の技法を現代建築の文脈において再解釈する。同時に、モダニズムを基盤としながらも日本的な解釈によって外部環境との独特な関係を内包する日本館でこれを展開することで、均質化された建築とは異なる、環境と身体が応答しあう空間の可能性を示す。

空間を固定されたものではなく、身体との関係のなかで生成されるものとして捉え直し、建築と人間のあいだに新たな関係性を見出すことを目指している。

菅健太郎 (コキュレーター/環境エンジニア)

出品作家・建築家等の選定理由

## なぜこのメンバーなのか

近現代の建築が追求してきた、機能的で均質で合理的な空間というインフラの上に、有機的で、形容詞的な空間を実現する。そのために、医療、作庭、環境、音、プログラムなど、物質的ではなく揺らぎのある現象と向き合ってきたプロフェッショナルたちと共に取り組みたいと思う。



### 馬場 正尊 (OpenA/東北芸術工科大学教授) キュレーター/エディター

博報堂、早稲田大学博士課程、雑誌『A』編集長を経て、2003年OpenAを設立。同時期に「東京R不動産」を始める。公共空間のマッチング事業『公共R不動産』立ち上げや、沼津市都市公園内の宿泊施設『INN THE PARK』の運営など、設計/デザインを軸としながら、規模や領域を横断し、建築や都市の可能性を追求する。

#### キュレーター兼エディター

プロジェクトと空間の編集者として、メンバーの思考と表現、技術を融合、最適な掛け合わせとプロジェクトの実現を担う。

空間設計: 秦達也 (OpenA)    カタログ編集: 木下まりこ (OpenA)

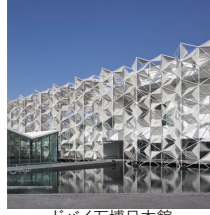


### 菅 健太郎 (Arup/京都工芸繊維大学准教授) キュレーター/環境エンジニア

環境設備分野のエンジニアとして、建築環境設計およびサステナブルコンサルティングに従事し、現在はサステナビリティリーダーを務める。建築デザインとエンジニアリングを統合的に捉え、建築環境のあり方を探究している。機械設備に過度に依存しないパッシブデザインや、従来の手法や価値観にとらわれない快適で心地よい空間のあり方を研究と実践の両面から追求する。



明園寺納骨堂



ドバイ万博日本館



大阪万博クラゲ館

#### 形容詞的空間の技術的基軸

空調機などの機械のない空間の設計や、技術と人間との付き合い方の変遷を熟知しながら、その先の、機械的ではない建築環境の生成を試行錯誤し続けている。現在「ポストビルディング」という本を共同制作中であり、近代の機能主義を超えた形容詞的な空間に対する技術的な裏付けを妄想中。(馬場)



### 山内 朋樹 (京都教育大学教授) 美学者/庭師

在学中に庭師のアルバイトをはじめ、研究の傍ら独立。個人宅や店舗の庭をつくるほか、庭をテーマとした作品やプロジェクトを発表している。また研究者としては、物体の配置や作業プロセスの分析をとおりて庭や美術作品のかたちの論理を探究している。



放棄地の庭



仮止めされた風景



『庭のかたちが生まれるとき』

#### ゆらぎのある風景の作庭者

庭師、美学者、翻訳家として、プロジェクトの世界観を作庭する。時間の揺らぎを扱う庭のプロフェッショナルとして、日本館を地形として見立て、環境や人に感応し、五感を呼び覚ます「風景」をつくり出す。(馬場)

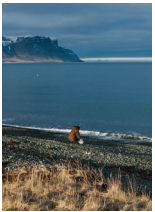


### 高木 朋 (ヒビノ株式会社) サウンドデザイナー/コンテンツディレクター

フィールドレコーディングと環境音楽の制作を基盤に、場所と空間のあいだに生まれる関係性や滲み、サウンドスケープデザインによって再構成する。商空間、オフィス、パブリックからアートインスタレーションに至るまで、環境と知覚を接続する音の体験を企画・制作している。場所の気配、テーマや文脈を音でデザインし、空間体験を拡張する。



サウンドインスタレーション"選択の恩恵"



2024 札幌国際芸術祭



#### 音による無意識の意識化

環境の音、身体音などを採集。サンプリングや増幅を行い、無意識の音を意識化する。フィールドレコーディングの領域を拡張させることで、この場所の気配や、テーマ、文脈を音でデザインし、環境音を生成するとともに、空間体験を拡張する。(馬場)

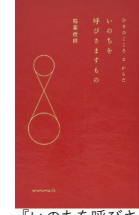


### 稲葉 俊郎 (慶應義塾大学SDM研究科特任教授) 医師/医学博士/著述家

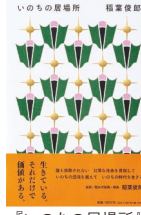
医師として医療現場で勤務しながら社会的な「いのちを呼びさす場」を作ること本務としている。芸術と医療と温泉が交わる芸術祭の創造や、医療と福祉の橋を架けるため障害者との芸術創造にも関与。「いのち」を軸にしたwell-beingの場の研究と実践に関わる。西洋医学だけではなく伝統医療、補完代替医療、民間医療も広く修め、医療と芸術、福祉など、他分野と橋を架ける活動に従事する。



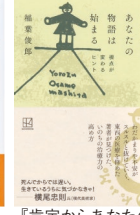
山形ビエンナーレ 芸術監督



『いのちを呼びさすもの』



『いのちの居場所』



『肯定からあなたの物語は始まる』

#### プロジェクトの思想的基軸

医師として医療の現場に立ちながら、数々の医学プロジェクトや、山形ビエンナーレの芸術監督なども務め、「生命の全体性」を探求している。以前対談した際の内容が、今回の世界観を実現したいと思ったきっかけとなっている。研究中の温泉水ミストをここで実装するなど、建築・美術と医学をつなぐ。(馬場)



### Alexander Reeder (art and program, Inc.) エンジニア/アーティスト/経営者

人間の思考・感覚・反応と創造性を用いたウェアラブルデバイスやインタラクティブ空間をつくりだす、エンジニア、アーティスト、そしてディレクター。空間との対話や、空間そのものが生きているかのように感じさせる表現を軸に、これまで多様な作品を制作。



2025 大阪・関西万博 電力館 可能性のタマゴたち



ミラノデザインウィーク Soul / Soil

#### 身体と空間のインタラクティブな関係性をつくる

建築と人間とのコミュニケーション・テクノロジーを実装する。空間と身体に対しセンシングを行い、みえない様相、五感を画像化。さらにそれを全世界へとリアルタイムで配信することで個人的な視点とメタ的な視点へと拡張される(馬場)

## 感覚を開き自分に向き合う二つの対話

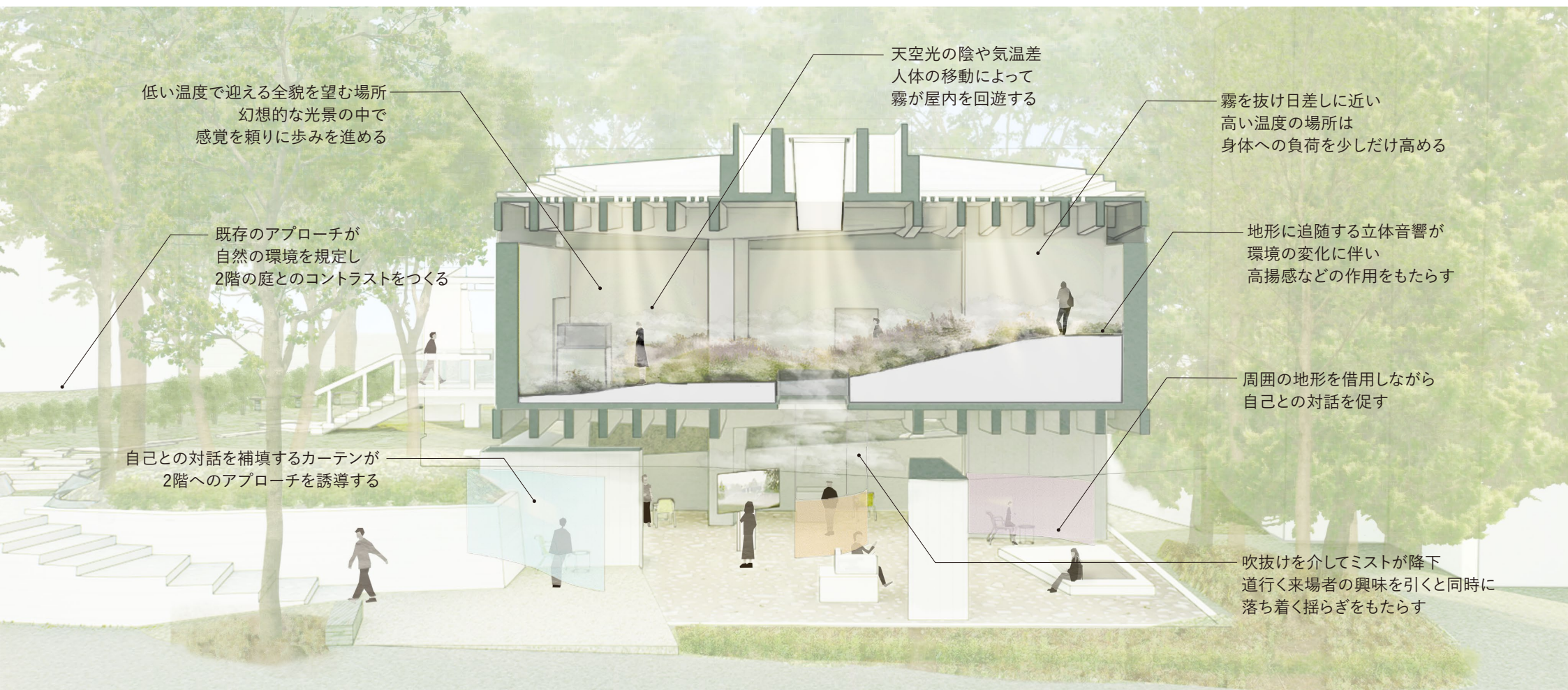
生命力溢れる樹林のアプローチを抜け、空間に入ると、土の地形と麦わら色の草原の、周辺とは似て非なる庭の風景が広がっている。その枯野の足元には霧が立ち込め、足裏が地面の感覚を拾う。動かない空間のなかで、陽、水、空気、音、そして自分は動いている。動いていること、生きていることに、少しずつ意識的になる。また外に出て、樹林の間を通り下階に降りる。椅子に座り、さっき体験した空間の中の自分のデータを見る。その時の自分の感覚や気持ちを思い出し自分と向き合う。客観と主観の往復。空間体験と生きる自分との対話の時間。小さな旅。

## 2階：環境との対話 “五感を開く庭の回遊”

霧が漂う空間のなかに温度や湿度の分布を感じるための地形と麦わら色のドライフラワーの野原を設ける。植物が繁茂する屋外とは対照的な時間が止まったかのような庭、その中で動く現象といった連続と差異を生む。来館者は異なる温湿度、音や匂い、足裏の感触の揺らぎに敏感になり、環境と対話する身体の変化をより鮮明に感じとる。 - 山内 朋樹

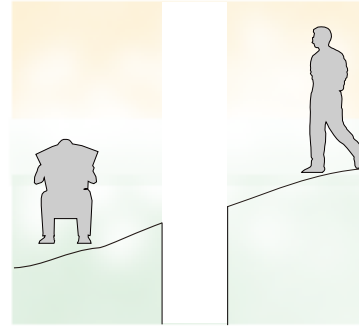
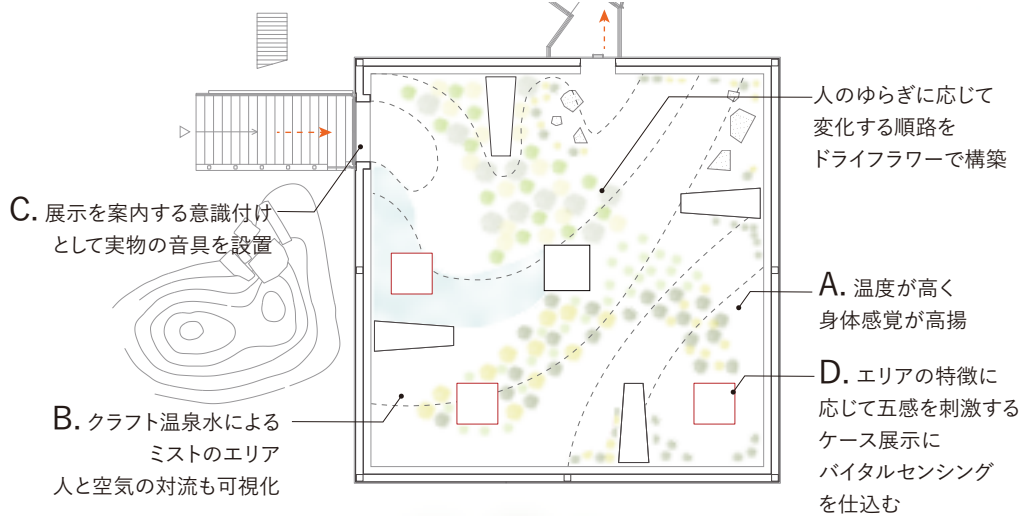
## 1階：自己との対話 “内向的な観察と余白”

2階の環境を示すモニターと、1人掛けの椅子およびQRコード付きのサイドテーブルを配置する。2階の庭の中に仕掛けたセンサによって人の感情を観測し、客観的に自己を見つめる居場所として内向的な対話を促す。記録はWEBシステムを介して世界にも匿名配信され、個人の内省は地球規模の生命への問いかけへと繋がる。 - OpenA



## 対話を促す仕掛けを散りばめる

外部空間も含めた螺旋状の回遊導線の中に、知覚を鋭敏にするための仕掛けを散りばめる。各出展メンバーの技術と知恵を反映する種々の仕掛けにより、来場者からweb上の参加者まで、環境や自己との対話を促していく。



### A. 温度ムラのある気候

- 菅 健太郎

地形の起伏が生み出す高低差を設え、場所ごとに異なる微気候を意図的に計画している。重厚な冷気が滞留する低所から、陽光の熱を帯びた暖気が上昇する高所まで、空間内にグラデーション状の「温度の風景」を現出する。この不可視な熱の境界線は、展示物の文脈と共鳴し、静謐な没入や高揚感といった心理的变化を身体感覚を通じて増幅させる。近代的な均一な快適さを超え、肌で感じる温度の揺らぎが鑑賞者の感性を刺激し、環境へ適応する人間本来の機能を実感させる。

※協力機関等: 京都工芸繊維大学、京都教育大学

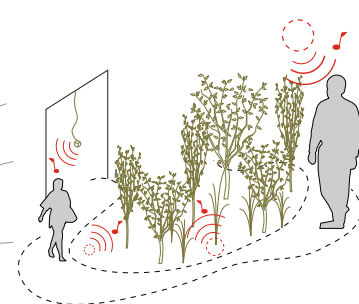
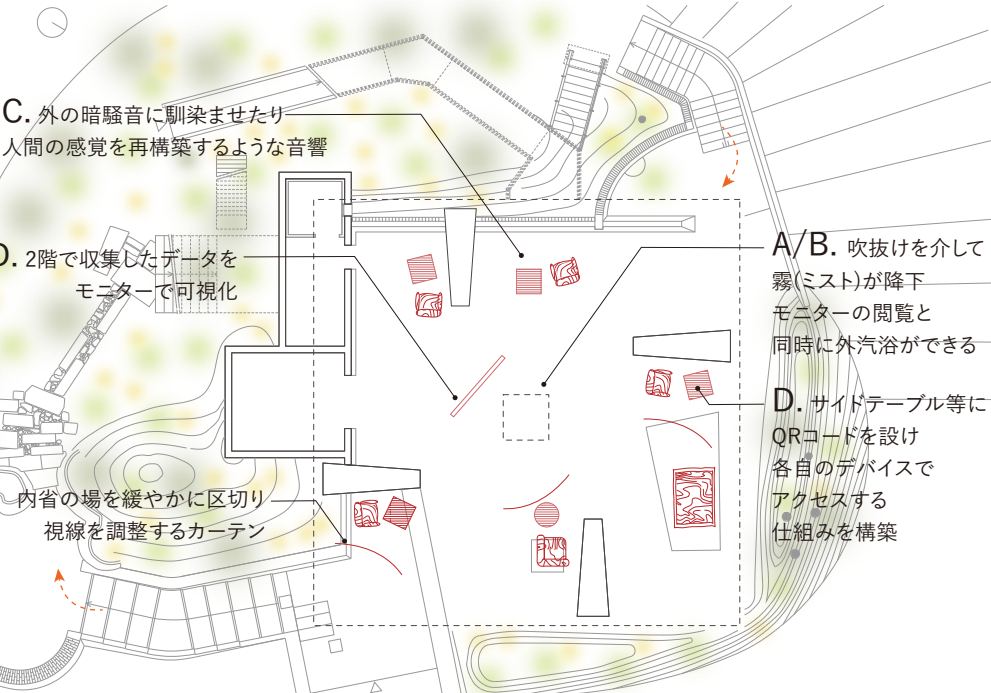


### B. クラフト温泉水によるミスト浴

- 稲葉 俊郎

天然鉱石からミネラルを10,000倍に抽出・濃縮した「クラフト温泉」を日本から導入し、霧状のミストにして散布する。服を着たまま超微細な温泉ミストを浴び、深呼吸することで、良質な成分を体内へ直接取り込むことが可能な「喫泉」という文化を提供する。高濃度圧縮により長期保存や運搬が可能になったことで、中東をはじめとする海外へも輸出されており、場所を問わず高品質な温泉体験を選択できる未来のインフラとして、生命と環境の新たな接点も示す。

※協力機関等: 慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート、le-furo

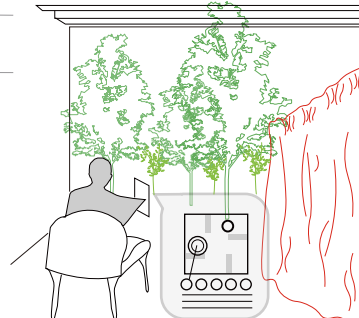


### C. 意識を揺らす音響

- 高木 朋

入口に置かれた象徴的な音具は、外の環境を内側へ引き込むアイコンとして、訪れる人を建物の奥深くへと導く道標となる。音響の配置が空間の形に寄り添うことで、観察の対象を意識からずらすあるいは誘導するような立体音響とする。実在の自然で生成する音を録音し、水の流れる音や葉の擦れる音など、自然の中にいると錯覚させるような音や、センシングした情報と紐づく音を想定している。展示を体験する中で感覚、感性が開かれ、自己との調和を感じるような体験を提供する。

※協力機関等: 東北芸術工科大学、ヒビノ、ヒビノスペーステック



### D. 感情を可視化するセンシング

- Alexander Reeder

非接触で脈を計測し、感情を推定するバイタルセンシング(集中、緊張、倦怠、疲労など)と、感情の変化を及ぼす展示空間の状態を推定する空間センシング(温度、気圧、空気汚染など)を行う。センシングデバイスは展示物の一部等に擬態するように仕込み、来館者が展示を眺める動作と表裏一体で計測を行う。また、取得した情報の可視化を行うwebシステムを構築する。日本館本来の空間情報も含め、どのような環境が感情への影響を与えるかを問うグローバルな実験となる。

※協力機関等: 慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート、FCLコンポーネント